

## 林達也先生を送る

近 衛 典 子

この三月を以て林達也先生がご定年を迎えられる。これまで私たちは林先生の颯爽たるリーダーシップに導かれて歩んできた。一抹の寂しさを禁じ得ないが、先生の新たな門出を心より祝福申し上げたい。

林達也先生は誰よりも駒澤大学のためにお力を尽くし、大学を愛して来られたように私には思われる。先生は東京大学文学部、同大学院で学ばれた後、青山学院女子短期大学、東京外国語大学などを経て、昭和六十一年、駒澤大学文学部国文学科に着任された。以来、二十六年の長きに亘って駒澤大学の発展のために貢献して来られた。平成十年に学生部長、平成十四年には図書館長、さらに平成二十一年からは仏教文学研究所長という重職を歴任されたが、その数多のご功績の中で、今あえて一つを取り上げるとすれば、図書館長在任中に着手された図書館改革が挙げられよう。九時から二十二時までという開館時間の大幅延長、日曜開館、地域への利用開放、館内のパソコン環境の整備、静粛を旨とする館内でグループ討論のできるスペースの開設など、数々の先進的な改革が大胆に実行に移され、教育・研究環境は飛躍的に整えられた。大学の社会的使命が問われる昨今、他大学に先駆けて実現されたこの改革は、書物

を命とする我々国文学研究者にとつて、とりわけ有り難いことであつた。本学図書館は他大学の研究者からしばしば高評価を受けるが、その基は林先生によつて築かれたと言つても過言ではない。学科においても、難題に遭遇した時にはいつも大局的見地から、実に細心のアドバイスを下さつた。その親身で温かなご配慮は誰に対しても公平に向けられ、そのお人柄は教員のみならず多くの事務職員からも慕われている。

このような激務を軽々とこなされる一方、研究においても細川幽齋を始めとする中・近世和歌の世界で目覚ましい成果を挙げられ、本学で和歌文学大会を引き受けられるなど、精力的に学会を牽引して来られた。近年世に出された『室町和歌への招待』（笠間書院・共著）、『江戸時代の和歌を読む―近世和歌史への試みとして―』（原人社）は、室町から江戸にかけての和歌そのものの豊饒な魅力を十全にわかりやすく示されたもので、研究書でありながら、同時に広く世に文学の面白さを発信する啓蒙書としても読まれるべき、優れた書である。多くの後進の育成にも尽力され、大学での通常講義のみならず、ご多忙の合間を縫つてご自宅で研究会を組織し、きめ細やかなご指導を続けてこられたと仄聞している。一方、サッカー部の部長として本学のスポーツ選手にも温かな眼差しを注ぎ、応援して来られた。実は先生ご自身が大変なスポーツマンなのであつて、私はかつて研究会の仲間と共にボーリングやスキーをご一緒したことがあるが、その腕前は群を抜いており、先生の隠れた天分に驚嘆したものである。

林先生の周囲には常に豊富な話題と笑いがあり、楽しい雰囲気には満ち満ちていた。一時体調を崩されたが不屈の闘志で克服され、以前と変わらぬ快活な笑顔とダンディな装いで復帰なさつたのは、本当に嬉しいことであつた。

大学を巡る環境が激変し、混沌たる時代にあつて、今こそ林先生の明晰な分析力とバランス感覚を以て進むべき道を指し示していただきたい。今後も先生のご警咳に接することを楽しみにしている。